



先日、学術集会に参加するためベルギーを訪れる機会があり、ついでにルーヴェン・カトリック大学(KU Leuven)の精神科を訪問し見学させて頂いた。この大学は、行政・文化面で3分割されているベルギーのうち、オランダ語圏のフランダース地方に位置しているのだが、同じくフランダース地方でLeuvenの北にGeelという街がある。学生の頃にRoosens, E.の著作で、寺嶋正吾先生が翻訳され、1981年刊行の『ギールの街の人々』を読んだ記憶が蘇り、KU Leuvenの精神科長にお願いして、Geelの公立病院の担当精神科医にコンタクトをとって頂き、訪問させて頂いた。英語読みするとギールだが、現地だと「ヒェール」に近い発音となる。Geelは人口4万人程の小都市だが、精神疾患罹患者の里親制度のようなもので、一般家庭に精神疾患罹患者が同居し、一緒に暮らすという日本からするととても成り立ちそうにない制度が昔から現在に至るまで続いているユニークな街である。その起源は13世紀に遡り、精神疾患罹患者が聖ディンプナ教会(St Dymphna's Church)を巡礼し、9日間教会にこもって行う儀式「ノベナ」を行うようになり、15世紀になると、このノベナを行うためにGeelに滞在する患者が教会に宿泊できるような施設ができた。ノベナを実施するまで待つ、あるいはノベナを終えてもギールに滞在し続けるという患者のために、教会周辺の民家が精神疾患罹患者に宿を提供するようになったのが始まりだ。

そもそもこのような巡礼の起源は6世紀頃にアイルランドの王が精神に不調をきたしたあげくに、その娘ディンプナをこの地で斬首したことに由来し、いつしか聖ディンプナは精神の病を癒す聖者として祭られるようになったということだ。かつては農業を営む家が多く、住み込む精神疾患罹患者も一緒に農作業を行う形で、現在よりもずっと多

くの里親がいたが、社会が近代化して勤務者の比率が増えるにしたがって、里親の数は減ってきているらしい。それでも現在でも100軒前後の里親が精神疾患罹患者を引き受けているとのことである。このような制度を可能にするのは、古くから形成されてきた文化ということに尽きるのかもしれない。

里親の相談には公立病院のスタッフが24時間、365日、すぐに電話で応じ、必要があれば訪問し、また、適宜、入院を引き受ける体制にあることも後押ししているようである。このような人的体制しかり、手入れの行き届いた芝生と植込みの広大な敷地に点在する病棟、患者さんが運営する瀟洒なカフェ、隣接する瀟洒なグループホームの芝生の中庭にあるテラスのテーブルでお茶をのみながら談笑する住人の方々といった具合に、公立病院周りのインフラも実に豊かで驚かされた。街の人達が、精神疾患の患者さんを文字通り街や家庭に受け入れて共に暮らす文化があり、そのような住民のコンセンサスもあって、地方行政が精神保健福祉に大きく財源を投じているように感じた。カフェで声をかけて下さった患者さんは他の街から移り住んできたが、この街に来てから描画を楽しみ、海外への旅行にも挑戦するようになったとのことで、この街への転入が転機となったと感謝していた。街の人達は、総じて、親切で温かく、心が豊かで幸せそうに生活しているように感じられた。もっとも、旅行者の目なので良いところだけしか映っていないところはあるのだと思う。しかし、人々が精神疾患罹患者を受け入れ、精神疾患を患う人達が生き生きと暮らせる街、そして行政が精神保健福祉にしっかりと財源を投じている街は、当事者や家族だけではなく、住民全体が幸せに暮らせる街なのではないかと感じた。

富田博秋